「どうすればつて、當然、さうなつてゆくやうになつてゆく外ないぢやございませんか？」光枝は、屹と恭介の顏を見つめるやうにした。

「と言つて、平出さんは、あなたを離婚することを承諾しては下さらないでせう？」

「平出が、私を離婚して吳れたところで、お兄樣。あなたは、私と結婚して下さりはしないでございませう。ほゝゝ。」光枝は、嘲るやうに言つた。

恭介は、答へる言葉もなく押默つた。

「お兄樣。實は、かういふ手紙がまゐつてゐるのでございます。」と言ひながら、光枝は帶の間から一通の手紙を取出した。「まあ、讀んで下さいませ。そして、どうぞ、お兄樣も、覺悟をあそばして下さいませ。」

それは、東京の緒方貞吉から光枝に宛てた手紙だつたが、開いて讀んでゆくうちに、恭介の顏色は土のやうになつた。平出雄作が、二人を相手取つてたうとう告訴の手續きをはじめたといふことが、その手紙には告げられてゐた。そして、もう斯うなつては小生の力にも及ばない。これまでの骨折も、今は遂に水泡に歸した。一旦思ひ立つては、決して後へ退かぬ性分の平出氏のこと故、今更、どうしようもない——といふやうな絕望的な文句が添へられてゐた。

「光枝さん！」と恭介は戰く聲で言つた。「こんな手紙が來てゐるのに、あなたはどうしてそんな平氣な顏をしてゐられるのです。」

「だつて、仕方がないぢやあございませんか？」光枝は、動ずる色もなく言ひ放つた。「こんなことになつて、私、本當にお兄樣にはお氣の毒でございます。けれども、もうどうにも致し方はございません。」

恭介は、籐椅子の上にぐつたりと倒れた。彼は、物を言ふ勇氣もなかつた。——だつて仕方がない！　それは光枝の言ふ通りだつた。今更驚くことはない、これが當然の報いなのだ。さうは思ひながらも、恭介の心は、醜く狼狽せずにはゐられなかつた。破滅だ！　破滅だ！　彼は、かう心の中に叫びながら、眼の前に開けた暗い深い穴の前に、意氣地もなくわなゝかずにはゐられなかつた。その、意氣地なくわなゝく恭介の樣子を、光枝は、白刃のやうな冷たい眼で——殺人者が、自分の手にかけた者の死骸を眺めるやうな怖ろしい眼で、じつと眺めてゐた。

「光枝さん！」と、やゝ久くしてから、恭介は妙に乾からびたやうな聲で、喘ぐやうに言つた。「あなたは、ぢや、牢へはいる覺悟なのですか？」

「仕方がございませんわ。私、潔く法の制裁を受けるつもりでございます。――お兄様。私は、あなたと御一緒なら、喜んで牢屋の中へでもまゐるつもりでございます。」

喜んで牢屋の中へ――光枝の胸にやどつた執拗な復讐の女神は、この時會心の笑みを漏らしたに違ひなかつた。彼女は、恭介に復讐するために、己の愛を裏切つた男に對してその憎みを成就するために、まづ己の身を擲つを辭しなかつた。雄作と結婚したのも、この覺悟からである。相手に毒をすゝめるためには、自分も亦毒杯を、拒んではならない。彼女の復讐、彼女の憎みの成就、そのためには、牢獄も怖るゝところではないのであつた。

「いやだ！　僕あいやだ！」恭介は、光枝の手を振りほどいて、駄々ッ子のやうに叫んだ。

「そのくらゐなら、僕は死んだ方がいゝ！」

「死んだ方がいゝと仰有るの？」

「死んだ方がいゝのです。そんな恥曝しなことは、僕はいやです。」

「ぢや、お兄様、死んで下さいますか？」光枝は、屹と恭介を見た。

「お兄様が死んで下されば、私、いつでも死にます。――私、死ぬのは卑怯だと思ひましたけど、お兄様と一緒に死ねれば、本望でございます。」

「ぢや、光枝さん、あなたは本當に僕と死んで呉れるといふのですか？」恭介は、籐椅子から身を起して言つた。

「えゝ、お兄様さへ死んで下さるなら――。」

「本當ですか？」

「喜んで――。」

さう言ひながら、互に燃え輝く眼を見合せた時、二人の胸には、感激の波が搖れあがつた。二人は、思はず、兩手を握りあつた。そして胸と胸とを合せて強く抱き合ふやうにした。

「お兄様。私、本當にすまないのでございますけど、ぢや、どうぞ、私と一緒に死んで下さいませ。何事も皆運命だとあきらめて、一緒に死んで下さいませ。」光枝は、さう言ひながら、恭介の顏を見あげたが、やがて、胸が迫つたやうに恭介の膝の上に泣き伏して了つた。熱い涙が後から後からと流れて、光枝は、心から泣けるのであつた。――死ぬのだ。お兄様と一緒に死ぬのだ！　さう思ひ定めた時、光枝は、自分が矢張、深く恭介を愛してゐるといふことを、はつきりと自覺したのであつた。

憎んで、憎んで、憎み拔かうとしてゐながら、矢張、愛して、愛して、愛し拔いてゐたので

はなかつたか？　本當にこの人と一緒ならば、自分は喜んで死ねるのだ。何時死んでも惜くない自分の命だつたのだ。

一緒に死なう。それより外はないのだ――と、恭介も、さう思ひ切るより外なかつた。これが自分の運命だつたのだ。仕方がない！

――が、その時ふと彼の眼には、あの青ざめた頬が、涙に濡れた眼が浮んだ。「恭介様！」と呼びかける聲も何處からか聞えるやうな氣がする。「恭介様。死んではいけません！　死んではいけません！」

さうだ。死んではならない！

恭介は眼を閉ぢて、輕く首を左右に振るやうにした。

「お兄様。ぢや、本當に死んで下さるわね。」

「……。」

「今、死んで下さると仰有つたのは、本當でございますわね。」

「……。」恭介は、苦しげに喘ぐばかりであつた。

「あら、では、今仰有つたことは、うそでございますの？」恭介を見上げた光枝の眼は、その

顏色から、敏くも恭介の心を讀んだ。そして俄に冷たく氣色ばんで、詰るやうにかう言つたが、恭介は、答ふる言葉を知らなかつた。

「矢張、お兄様は死ぬだけの勇氣がおあんなさらないのね。ぢや、お兄様、どんなに恥曝しでも、なりゆきにまかせるより外ございませんわね。」光枝は嘲るやうな邪惡な調子で言つた。

死ぬことが出來ないといふならば、では、一緒に暗い處へ行くまでのことだ。どちらにしろ、あなたの運命は私のものなのです！　あなたは私のものなのです！　彼女は、今の今まで彼女の胸に燃えてゐた愛が、刹那に憎みに一變したのを意識しながら、かう心の中で言つた。

愛か？　憎みか？　憎んでゐるかと思へば愛してゐる。愛してゐるかと思へば憎んでゐる。

――光枝は、自分で自分の氣持がわからなかつた。兩頭の蛇――曾て父博士が言つたやうに、光枝の胸に成長した愛と憎みとの兩頭の蛇は、その兩つの頭を搦み合せて、彼女自身すら、いづれをいづれとも分ち兼ねるのであつた。

光枝と恭介とが、修善寺を引きあげて、東京へ歸らうとする日は、朝から荒れ模様で、大粒の雨が、礫でも投げつけるやうに強く降つてゐた。

「生憎のお天氣で――二百十日でございますから、少々は荒れるかも知れません。もう一日、

お延ばしになりましたらいかゞさまで。」といふ番頭のすゝめをもとりあげず、二人は十時の大仁發に間に合ふやうに宿を出た。

氣車に乘り込んだ頃には、風も止み雨もあがつて、荒模樣の天候が、からりとした好晴にかはり、しめつぽい雨後の空氣を蒸して、太く束ねたやうな光線が、激しい暑さでじり〳〵と照りつけてゐた。

三島で乘り替へた東京行の一等室には、祕書役らしい青年を從へた肥滿の老紳士と、新婚後間もないらしい美しい若夫婦と、それから子供連れの西洋婦人などが乘つてゐた。光枝と恭介とは、西洋婦人と向ひ合つたところに、並んで席を取つたが、二人は互に一言も口を利かなかつた。

恭介は、これから歸つて行く東京に何が待つてゐるかを考へずにはゐられなかつた。嚴めしい法廷、暗い牢獄——彼は、怯えた眼に、それ等のものを思ひ描きながら、死んだやうに青ざめてゐた。

が、光枝の方は平氣だつた。むしろふて〳〵しいばかりに平氣な光枝の樣子を見ると、恭介は、何となく怖ろしい、無氣味な氣がした。この人はどうしてこんなに平氣な顏をしてゐられ

るのだらう?——あなたとなら、喜んで牢屋の中へでも行くといふ。それは、本當に自分を愛してゐるからなのだらうか? さうばかりとは思へない氣が恭介はして來た。恭介は、光枝の心を測り兼ねた。何ものかゞ故意に自分を苦めるために、自分をかうした破滅に陷れるために、光枝のこの形骸の中に宿つて、今まで種々と自分を弄んでゐたのではないか?——そんな風にも思はれて來たのであつた。

汽車が藤澤の停車場を出た時だつた。恭介が汽車の窓から鎌倉の方を眺めて、そこの別莊にゐる筈の人に、

「那美子さん!」と、やるせない心の中に呼び掛けた時だつた。

その刹那だつた。規則正しい車輪の音が、大地の重い呻きに攪き亂されたと思ふ間もなく、列車がよろ〳〵と左右に搖れた。

「脫線!」「脫線!」口々にさう叫びながら車中の人は總立になつた。同時に人々は足もとを掬はれて横倒しに倒れた。轟然たる音響、高く揚がる悲鳴。悲鳴の中に、

「お兄樣!」と叫んだ光枝の聲だけを、恭介ははつきりと耳の傍に聞いた。歪んだやうな光枝の白い顏が、眼前を掠めて消えた。はつと思ふと同時に、何か大きな手でむんづと引掴まれ、

いやといふほど投げ出されたやうな氣がした。

「地震だ！　地震だ！」と叫ぶ人々の聲が、かすかに聞えた。――と思ふと、あとは何も判らなかつた。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分――。

この日、この時、突然襲ひ來つた大地震は、すべての人間の營みをその刹那に於て中斷し、すべての人間の境遇を、その刹那に於て粉碎した。その刹那！　いかにさまゞ〳〵の狀態に於て、人はこの怖ろしい刹那を迎へたことだらう？　或る者は、甘い戀の接吻の中に、或る者は哀しい別離の最後の握手の中に、或る者は神に祈りを捧げてゐた時に、或る者は、愛人への手紙を書きつゝある時に――喜びの時、悲しみの時、千狀萬態のさまゞ〳〵の時を、一樣に見舞つたこの怖ろしい刹那は、そこですべてを一樣の破滅の上に置いたのであつた。

その時、鎌倉長谷の別莊では、老博士と珊一とが、激しく相爭うてゐる最中であつた。

「あゝ、また！」博士の部屋から聞える二人の罵聲を聞くと、那美子は思はず溜息をついた。

父博士に對する珊一の反抗的な態度は、近頃ますゝ〳〵狂暴性を帶びて來た。今までは、博士の一睨の下に慄へあがつてゐた珊一が、今ではその激しい反抗で、却て父を壓迫するのであつた。博士がひそかに惧れてゐるやうに、彼は或る害意をその父に對して育んでゐるやうにさへ見えるのだつた。

那美子は、珊一を和めるために、足早に博士の部屋の方へ急いだ。

「擊つぞ。擊つて了ふぞ！」と叫ぶ物狂はしい珊一の聲がする。

「あぶない。何をする。これ、何をする！」博士の、喘ぎ戚、く聲がする。――そのたゞならぬ氣配にはつと胸を躍らしながら、博士の部屋に飛び込んだ那美子は、怖ろしい光景の前に立ちすくんだ。

部屋の隅に押し詰められた博士は、籐椅子を楯にとつて、よろめく足を踏みしめながら、恐怖にふるへる眼で珊一を睨んでゐる。珊一は、片手に執つた拳銃の筒口を博士に向けて、將に引金を引かうとしてゐる！

「珊一さん！　何をなさるの？」その怖ろしい光景が何を意味するかを了解した時、那美子は思はずかう叫んで、珊一に飛び縋つた。その時遲し珊一の手の拳銃は耳をつんざく音を立てた。

ぱつと立つ煙の中に博士はよろ〳〵と倒れかけたと思ふと、彈丸は外れたと見えて、すぐにすつくと立ち直つた博士は、

「馬鹿者！」と大喝した。

「畜生！　畜生！」珊一は、背後からしつかりと抱き止めた那美子の手を振りほどかうと死物狂ひにもがいた。そして、短い烈しい爭鬪の後に再び拳銃をもつた手をふりあげて、あはや引金を引かうとした刹那だつた。——丁度その刹那だつた。潮の遠鳴りのやうな音が遠くから寄せて來たと思ふ間もなく、ぐら、〳〵、〳〵と大搖れが、地の底からつきあげて來た。

地震だ！——三人は、そのまゝ化石にでもなつたやうに立ちすくんで了つた。そして思はず顏を見合せた瞬間に、めり〳〵と天井が裂けた。つゞいて四方の壁が土煙を立てゝどつと落ちた。物の落ちる音、柱の碎ける音、すべての線と角度とが、めちやくちやに亂れ合つたと思ふ間に耳を聾するばかりの響につれて、家は横倒しに倒壞した。逃げ出す足もとをさらはれて、三人が三人共、波に搖られる船底のやうな床の上にこけつまろびつしてゐる上に、轟然たる響を立てゝ、天井が、屋根が、崩れ落ちた。

あッと思ふと同時に、那美子は、自分の身體が、何かの上に叩きつけられたのを——右の肩

のところに激しい打撲を受けたのを感じた。が、那美子は、素早く半身を起した。と、そこに窓が開いてゐた。天井際の高窓がすぐ眼の前にずり落ちて、そこから明るい外光がさし込んでゐるのを那美子は見た。

「をぢさま。珊一さん。逃げませう。逃げませう。」と那美子は、やうやく身を容れる程に狹まれた空間の、土埃の渦卷く中に叫びかけた。と、彈かれたやうに珊一の身體が、那美子の前に轉がつて來た。

「珊一さん！」

「那美子姉さん！」二人は思はず相抱いたが、

「をぢさまは——をぢさまは——。」と那美子は、狂氣のやうに叫んだ。

「俺に構ふな。」と、窖のやうな空隙の中から博士の聲がした。「那美子！　珊一を頼む。俺に構はずに早く逃げろ！　珊一も、早く逃げろ！」

「をぢさまも、早く、早く！」

「俺は死ぬ！　はゝゝ。俺はやうやく死ぬことが出來る。はゝゝ。」博士の聲は落着いてゐた。

「いゝえ。をぢさま。あなたも、あなたも——。」と、那美子がその暗い隅に這ひ寄らうとした

時、二度目の大搖れが來た。再びがら〳〵と物の崩れる音の中から、
「早く、逃げろ！　逃げろ！　那美子！　珊一！」博士の聲が叱咤するやうに聞えた。

橄欖の葉

是に於て水次第に地より退き百五十日を經てのち水減り方舟は七月に至り其月の十七日にアララテの山に止まりぬ水次第に減て十月に至りしが十月の朔日に山々の巔現はれたり四十日を經てのちノア其方舟に作りし窓を啓て鴉を放出ちけるが水の地に涸るまで往來しをれり彼地の面より水の減少しかを見んとて亦鴿を放出いだしけるが鴿其足の跖を止べき處を得ずして彼に還りて方舟に至れり其は水全地の面にありたればなり彼乃ち其手を舒べて之を執へ方舟の中におのれの所に接入れたり尚又七日待ちて再び鴿を方舟より放出ちけるが鴿暮におよびて彼に還れり視よ其口に橄欖の新葉ありき是に於てノア地より水の減少しをしれり。

——「創世紀」第八章——

世界の歴史創まつて以來の大慘禍と言はれる大震災、大火災！　二十萬の生靈は、水火の中に悶死した。明治大正五十年の文明が、東海のほとりに蜃氣樓の如く造り浮べた都東京は、僅か一日二日の間に、一望の焦土となつて了つた。

しきりなしに襲ひ來る餘震の中に、饑渴の苦しみと殺虐の怖れの中に、人々は生きた心もなかつた。家を失つた幾十百萬の人々が、喪心したやうな顏をして、或は物狂はしい表情をして、まだ餘燼の燻ぶるその焦土の上を、ぞろ〳〵と東に西に惑ひ歩くやうな日が、三日、四日、五日、十日と繰返された。

が、その、世の終りかとも思はれた混亂と不安との中に、少しづゝ秩序が回復して、ところどころにバラックが建ちはじまる頃は、もう秋も深くなつてゐた。そして、夜になると、崩れた煉瓦の間に蟲が鳴き、再び武藏野の昔にかへつた東京の、遮るものもない夜天には、あまりに明るく冴えかへつた大輪の月が、蹌踉としてさまよふのであつた。

その明るい月は、バラックの窓に倚る那美子の、淋しい頰をも照らしてゐた。

それは、駿河臺の病院であつた。震災に傷いた人々のために、取敢ず造られたバラックの病院に、那美子は二人の看護者として、もう一月近く暮してゐるのであつた。二人といふのは

珊一とそして恭介とであつた。

藤澤の驛近くで汽車が顚覆した時、恭介は、その頭部と上膊部とに重傷を負ひ、車體に敷かれて壓死した光枝の死骸の傍に、人事不省のまゝで倒れてゐたのを、救護の人達の手で、一先づそこの假病舍に收容されたが、やがて東京に運ばれると、老僕の計らひで、こゝの病院に入院することになつた。そして珊一に附添つて、同じくこの病院に來てゐた那美子と、圖らずも落ち合つたのであつた。

「おゝ那美子さん！」重傷のため、長い間意識の鮮明を缺いてゐた恭介が、やうやく人心づいた眼の前に、やさしくほゝゑんでゐる那美子を見出した時は、唯、一言かう言つたきり、あとは、口がきけなかつた。恭介の傷は、かなり重かつたが、二十日ばかりの後には、もう起きあがることが出來るやうになつた。

恭介は、那美子の口から山内博士の死を聞き、那美子は恭介の口から光枝の死を聽いた。親子二人が二人ながら、處もさう隔たつてゐない藤澤と鎌倉とで、一時に非業の死を遂げたといふ事實の前に、那美子と恭介は暗然として顏を見合せたのであつた。

「さうでございましたか！　まあ、光枝さんは本當に——。」と光枝の死を聞いた那美子は涙を

呑んで言つた。「本當に、お亡くなりになつて了つたのでございますか？」
「何しろ、もう、あッといふ間もないくらゐでしたからね。僕は、自分がかうして生きて居れたのが不思議なくらゐなのです。」
「本當に御運がよろしうございました。私、かうしてあなたにお目にかゝれるなんて、何だか夢のやうな氣がするのでございます。」
「本當に夢のやうです。何も彼もが皆夢のやうです。——それで博士もたうとう死んでお了ひになつたんですね。」
「え、たうとう——。」と、那美子は眼を俯せた。博士が、逃げれば十分逃げられる餘裕があつたのに逃げようとしなかつたこと、自分を殺さうとした珊一を、自分の手で危地から救ひ出して置いて、自若として死を迎へたこと——那美子は、博士の死に就いて細かに恭介に語り聞かせた。そして、言ひ添へるのであつた。
「珊一さんは、殺さうとするほどをぢさまを憎んでゐたのですけれど、をぢさまは、珊一さんを愛してゐらしつたのでございます。そして珊一さんも今では、後悔してゐるやうでございます。可哀さうに珊一さんは、をぢさまが自分の撃つた拳銃で死んだのだと思ひ込んでゐるらし

欠

「那美子さん。」と、改まつた調子で那美子を呼びかけた。そしてだしぬけにかう言ひ出した。

「私、明日、北海道へ歸ります。」

「あら！　そんなに急に――。」と、那美子は驚きの眼を瞠つて言つた。まだ一月ぐらゐは滯在してゐて、その間に、那美子もいろ〳〵の準備を整へて、一緒に北海道へ行くといふ約束だつたのに、急に明日歸るといふエリザベッタの言葉が、那美子には腑に落ちないのであつた。

「東京での用事が、思つたより早く片付きましたから、私、あまり雪が深くならないうちに、北海道へ歸らうと思ひます。」

「でも、私は、まだまゐれません。」那美子は、二つの病床に眠つてゐる恭介と珊一とを見やりながら言つた。

「那美子さん。あなたはどうしても北海道へ行くおつもりですか？」

「え、。伴れて行つて戴きたうございます。」

「那美子さん！」とエリザベッタは、思ひ入つたやうに、那美子を呼びかけて、「私、あなたを伴れて北海道へ歸るつもりで居りました。けれども、私、それを止めました。」

「では、私を伴れて行つては下さらないのでございますか？」

欠

「あなたは、北海道へ行くよりも、この東京にゐた方がよろしいと、私思ひますっあなたは、この東京に入用な人だと思ひますから」

「なぜでございますか？」

エリザベッタは、やさしい微笑で那美子の眼を見迎へた。そして、恭介達の方を見ながら言つた。

「この人達は、あなたがなくては生きて行かれない人達ではありませんか？」

那美子は、默つて首を垂れた。

「那美子さん。この前私、こゝへ訪ねて來た時、あなたは泣いてゐましたね。あなたは、この方を愛してゐます。私それを知つてゐます。あなたの愛は正しい。長い間あなたは苦しんで來られまました。あなたは、神樣のお試みに、たうとう勝つたのです。そして、神樣からその正しい愛を許されたのです。愛しておあげなさい。そして、幸福にお暮しなさい。」

那美子は、その優しい言葉を聞くと、萬感胸に迫るといふ風にして、忍び音に泣きはじめた。

エリザベッタは、その肩に兩手をかけて、抱きよせるやうにして、

「あなたは、この二人の人達に入用なばかりではありません。この東京には、あなたのやうな

人がいるのです。あなたのやうな美しい精神が、犧牲の精神が、いるのです。それがないために、この東京といふ都會は、神樣のお怒を受けたのですよ。そして、ソドムのやうに燃かれたのですよ。東京が再び蘇るためには、あなたのやうな人が、あなたのやうな精神が必要なのですよ。ね、私、さう思ふのですよ。あなたは、この東京にゐた方がよろしい。この東京にゐて人をも幸福にし、自分も幸福にお暮しなさい。可哀さうに、可哀さうに、あなたは、澤山澤山苦しんだのです。——よく、苦みに堪へて呉れました。神さまは、もうお許しなさいました。お許しなさいました。」

那美子は、エリザベッタの膝に顏をおしあてゝ泣いた。エリザベッタの眼にも涙があつた。細かにふるへる那美子の後項の上で、エリザベッタの胸にかけた金の十字架が窓からさし込む月の光に輝きながら幽かにゆれた。窓からさし込む月の光は——荒寥とした廢都の秋を照らす月の光は、ほの暗い電燈の光と交り合つて、相抱いた二人の姿を、その複雜な陰影の裡に一枚の聖畫のやうに描き出したのであつた。

恭介の傷が全く癒えて、退院したのは、十一月の初めであつた。珊一も一週間ばかりおくれ

て退院したが、不幸にも、珊一は、白痴に近い狀態になつて了つた。

が、手箱の底から發見された博士の遺書通り、山内家の家督は、珊一によつて繼がれることになつた。何時書いておいたのか、はしなくも見出された博士の遺書には、珊一が山内家の繼嗣たるべきこと、その財産は、これを半ばに分け、一半を珊一に、一半を那美子に贈遺すべきこと、などが認められてゐた。博士の、珊一に對する心づかひは、その遺書にもはつきりと語られてゐた。

エリザベッタのすゝめによつて、修道院行きを斷念した那美子は、恭介と共に、珊一の後見として、靈南坂上の山内博士の邸（邸は幸ひ類燒をまぬかれてゐた）にとゞまることゝなつた。——すべての運命が今や正しい軌道に歸つた。幸福な愛の生活が、恭介と那美子との間にひらけた。

が、この新生の歡びが、どんなにいたましい記憶で裏附けられてゐたことか！

青山墓地の山内家累代の奥津城どころには、新しい二つの墓が建つてゐた。一つは、博士の墓だつた。一つは光枝の墓だつた。——光枝は、平出家の者になつてゐたが、夫との仲が、あした關係になつてゐたので、すべてをこちらに引取ることにしたのであつた。

那美子と恭介とは、時々、その墓に詣でることを怠らなかつた。

那美子も恭介も、或る激しい感動なしにその墓の前に立つことが出來なかつた。殊に、那美子は、その墓の前にうづくまつて、そのまゝ土の上に泣き崩れて了つたりすることがよくあつた。

「那美子さん、さあ、もう歸らう。」恭介は、いつまでも、その前を去らうとしない那美子を、かう言つて促さなければならなかつた。

「御免なさい。私、何故こんなに泣蟲なのでせう。——でも、私、いろ／＼のことを思ひ出すもんですから。」泣いた眼に淋しい微笑を浮べて那美子はいふのであつた。「私達は、本當に幸福ですわ。こんな幸福な時が私達にめぐつて來ようなんて、私、全く夢のやうでございますわ。けれども、私、自分が幸福だと思ふにつけても、光枝さんやをぢさまのことが思はれてならないのよ。ね、光枝さんは本當にお氣の毒ですわ。光枝さんは、本當にあなたを愛してゐらしつたのですもの。」

「さうです。あの人は、隨分僕達を苦しめた。けれども、それは皆、僕に對する愛からだつてことは、僕にもはつきり判るのですよ。」

「醜いられない愛のために、光枝さんは、あんな風になつておしまひになつたのですわね。」
「さうです。山内先生だつて矢張さうですよ。」
「をぢさまも、本當にお氣の毒ですわ！」
しめつぽい墓地の空氣の中に、靜かな歩みを運びながら、二人はこんな風に語り合はずにはゐられなかつた。
二人が家に歸るのを、珊一は玄關の柱によりかゝつて待つてゐた。珊一は、いたましい白痴になつてはゐたけれど、今の彼は幸福だつた。彼の弱々しい、と同時に荒々しい過敏な魂にとつては、すべての意識をくらまされたこの渾沌の境こそ最も惠まれた世界であらう。その當座は、時々は、あの怖ろしい刹那の記憶が影がさすかして、怯えたやうな眼附をして、じつと部屋の隅に慄へてゐることなどもあつたが、今では、彼はいつも樂しげだつた。あの押歪められたやうな顏付も、ある穩かな相を浮べてゐる。常に、憤に燃え物怖ぢにわなゝいてゐた眼にも、夢見るやうなどやかな表情が湛へられてゐる。渾沌たる頭腦にもほのぐらとさす光、がある。そして、その薄明の中に、一つの夢が浮んでゐる。すべての思考を失ひ、判斷を失つたが、直接にその魂の眼で見る夢がある。それは正に來らねばならぬ筈の、美しく調和さ

れた世界の映像ではなかつたらうか？
「珊一さん、あの繪はもうお出來になつて？」午餐の後の卓にぼんやりと頰杖をついてゐる珊一を、やさしく見やりながら那美子がきくと、珊一は、
「うん。」とうなづく。
そして、それを那美子に見せるために那美子を彼の畫室にと導くのであつた。——白痴になつても、珊一は繪筆を弄ぶことは止めなかつた。そして、彼の描く繪は一風かはつてゐた。心に浮んだ風景を、そのまゝカンバスの上になすりつけるといふやうな彼の繪は、一寸見ると何が何だかわからないやうなものであつた。人の顏のやうなもの、花のやうなもの、そんな、何ともわからない物の象がめちやくちやに描かれてゐる。が、そのめちやくちやな畫面のもつ不思議な諧調が、ある深い感じを觀る者の心に與へるのであつた。
「よく書けたわねえ。」那美子がかう言ふと、珊一は、嬉しさうににこにこと笑ふのであつた。そこで、那美子は、珊一と向ひ合つてしばらく話をする。珊一の話は、その繪と同じくめちやくちやなのである。何を言ふのかとりとめもないのである。が、珊一の話は、不思議に那美子を喜ばせる。那美子は、珊一と話すことを樂しい日課の一つとしてゐるのであつた。

彼等の生活は、かくて極めて平和だつた。その平和の生活の中で恭介は、再び忠實な學徒の精神を取戻した。彼は、朝から書齋に籠つて一度放擲した大著述の稿を續けはじめた。その著述は、少くとも一年の後には完成するであらう。そして、學術の世界に一つの驚異を齎すであらう——と信ぜられてゐる。

那美子も亦、忙しい人だつた。那美子が、最初に着手したのは、育兒院の經營だつた。彼女は、井の頭の方に、瀟洒とした子供達の家を造つて、凶災のために父母を失つた憐れな孤兒達をそこに收容した。

その子供達の家は、「鳩の家」と名づけられてゐた。那美子は、その「鳩の家」のやさしい小母さんだつた。百人あまりの子供達——それはあの恐ろしい火と水との中から、危難と壞滅との中から逃れて來て、新しい命と力とを廢墟の土に芽ぐませてゐる者達だつた。あの、ノアの方舟から放たれて、橄欖の若葉をくはへて歸つて來た鳩にも擬ふべき者達であつた。——彼等は、自分の上に見舞はれた怖ろしい災害などは忘れて了つて、嬉々として戯れ歌うてゐる。人間の永遠の希望が彼等の上に輝いてゐる。

那美子は、毎日、そこへ出かけて行く。子供達は、このやさしい小母さんを待ち構へてゐて、

彼女の姿を見つけると、われがちにと彼女の周圍に集つて來る。そして、

「小母さん！」

「小母さん！」

と、彼女にとりつく。彼女は、その幼い者達の上に、萬遍なく慈愛の微笑をなげかける。——まことに、女神の化身のやうに。

——「煉獄の火」了——

大正十三年十一月二十日印刷
大正十三年十二月九日發行

發兌

著者　加藤武雄

發行者　東京市日本橋區數寄屋町一番地　濱井松之助

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　上村新輔

博文館印刷所

煉獄の火

定價貳圓五拾錢

東京市日本橋區數寄屋町一番地

大阪屋號書店

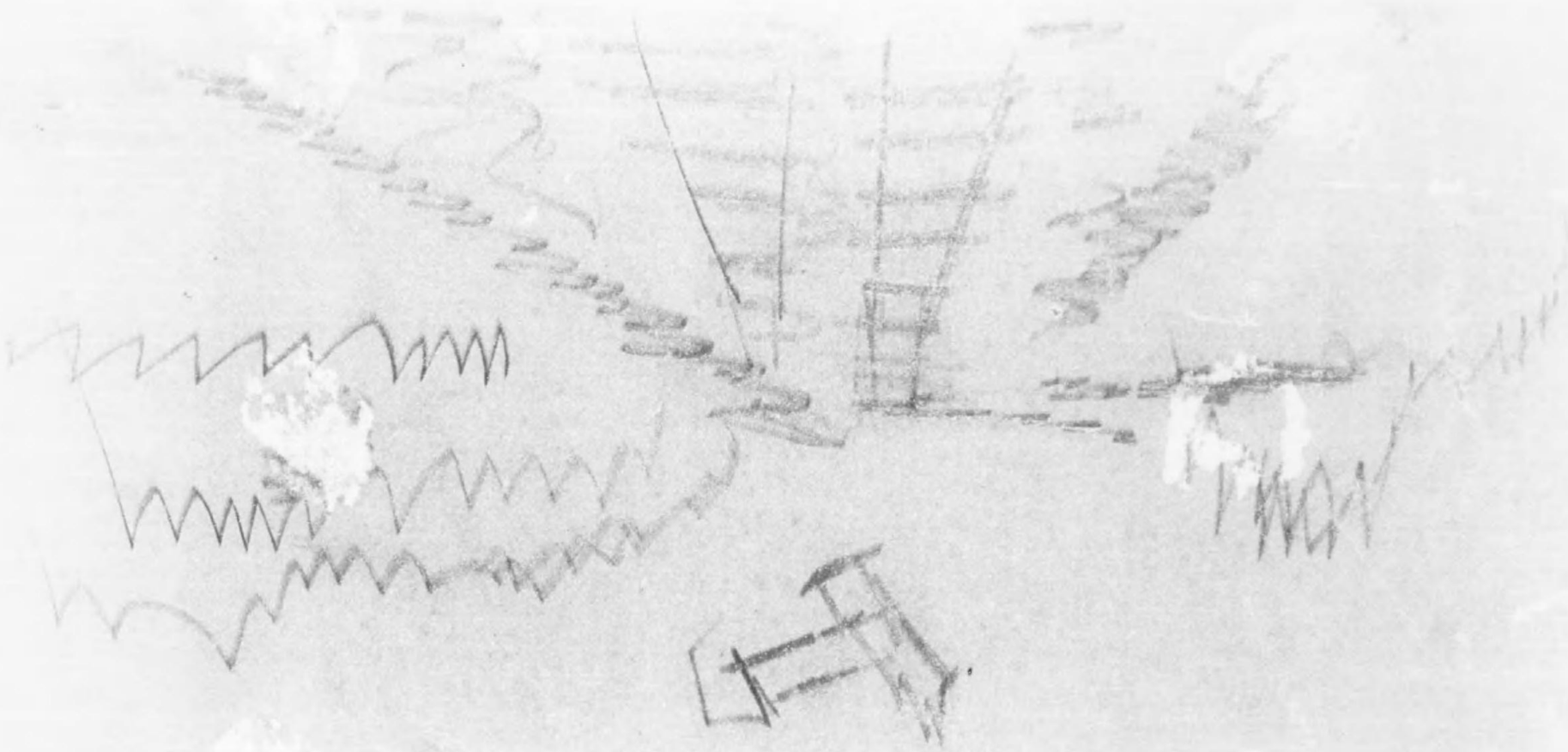
振替東京一三七五番
電話大手三七三七番

沖野岩三郎著　創作　生れざりせば　定價貳圓五拾錢　書留送料廿一錢

同　前編　星は亂れ飛ぶ　定價壹圓八拾錢
　　後編　白路を見つめて　定價壹圓八拾錢　送料各十五錢

同　創作　渾沌　定價壹圓八拾錢　書留送料十五錢

石丸梧平著　創作　小説家志願　定價壹圓八拾錢　書留送料十七錢



終